

のではないか。

もう一つは夫に対してである。この妻の涙は乱ぼうな夫をやさしい男に変えた。女性の涙にはこのような強い力があると語っているのである。

「ロムビアとマカラ」には、母親とロムビアが登場している。

母親は小さいマカラのために乳をのこしてくるが、約束を破ったことはゆるしてくれない。

二人の子供をのこして岩の中へ消えてしまうところは、きびしさを表現しているのであろうか。

ロムビアは弟思いの姉である。姉弟の愛情の物語りも日本にあると考えられるが、このような展開の話は今回見つけられなかった。

六

最後に女性像の問題として、右のこうさつをおぎなつて、この成果報告を終わることにしたい。

「魔法の上衣の行方」に出て来る天女像はインドネシアと沖縄、奄美地方の伝説がびったり重なつていて、特に違つところは見出せない。

「難病の王女と白い水牛」の王女については、後半部分の王女の結婚に特色がある。

ここで女はほとんど対等という風で王子の求婚に応じている。これに対して、日本の三地域の伝説には、王女にあたる地位の女性が出てこなかったこともあったが、姿、形の美しい娘が一方的に身分の高い人にめしあげられるというのが全てであった。

日本の伝説には身分の違う時代の話が多いということであろうか。

「老婆と干上った魚」の後半部分。無心にしんこうする老婆とそのしんこうをうるさがる男が神様のおほしめしにあずかるころ（三地

域の伝説にはない）だが、日本では人がよくて正直なおじいさんと欲のふかいお婆さんというとりあわせが多いのではないかという気がする。

「王女の物語」の次々と姿を変える王女のことには先に述べたが、「山々の由来」には、息子から求婚されるほど、年をとらない母親が出て来る。この年もとらず、次々と姿を変えることが出来る女性のみりよくも、日本の伝説にはないように思った。

日本の伝説では、沖縄の「与那国祭の由来」に、異国人をげきたいするために鍋の切れと、もちあわを鉄みたいになるまでねつたものとを別べつに重ばこに入れてもつて行き、異国人には鍋の切れを出し、自分たちも同じものを食べているふりをして、異国人をおどろかし、退去させた「神ぶりをしている女」がめずらしかった。

頭の良い女性である。

また沖縄の「ながま、すに」には津波の中で、自分の子供と兄の子のどちらかを放さなければならなくなつて、自分の子供をはずす母親が出て来る。実家の血を守つたということだが、これも印象的で、インドネシアの神話、伝説には出てこなかった。

今回は時間のせいやくから、三つの地域の伝説との比較しか出来なかったが、日本全国に目を通せば、もつとはつきりする点も出てくるに違いない。

又、インドネシアの神話、伝説も調べればもつと出てくるかもしれない。このようなかだいを今後にのこしながら以上で、今回の成果報告を終えたい。

このようなきかいを与えてくださつたよかトピア記念国際財団に、あつくお礼を申し上げる。

(一九九三年十月四日受理)

ところが、マカラは、はらごまで一人で食べてしまった。帰ってきた母親ははらごを残してないことが分かると、非常におこつて「これから家に帰らない」と言つて、家を出て行つた。

ロムビアがなんかい呼んでも、母親はそのままかけて行つた。しかし途中で貝殻を見つけると、乳をしぼって、その中に入れて、地面の上において行つた。

ロムビアはそれを持って帰つて、マカラに飲ませた。

帰るようにと呼んだりするロムビアと、泣いたりたするマカラをそのままにして、母親はある大きい岩の所に着いた。母親は平手でその岩を打つて、ぴゅうと口笛を吹いた。

岩は家の戸のようにぱつと開いた。

そして母親が中に入ると、すぐに閉じて、その姿をかくしてしまつた。

ロムビアとマカラは、二人で暮らした。そして、大人になつた。一軒の小屋を杣の上に建てたが、そのかいだんは一本の木だけでできていた。

マカラは一羽の雄鶏を飼つて、どこへ行くにも、一緒に連れて行つた。

ある日、マカラが外出する時に、ロムビアに「私が戻つたら、かいだんをおろしておくれ」とたのんだ。

マカラが発してから、すぐ見知らぬ男がやつて来て、マカラの様子をして、マカラの声をまねて「ロムビア、かいだんをおろしておくれ」と言つた。

ロムビアはマカラだと思つて、かいだんをおろすと、見知らぬ男が家へ入つて来て、ロムビアの膝に頭をのせた。ロムビアはその男の頭にしらみがわいているのを見て、それを取つてやつた。

まもなく、本当のマカラが帰つて来て、「ロムビア、かいだんをお

ろしておくれ」と言つた。

ロムビアはこれを聞くと「大きい木が私の上にかかっているので、立つことができない」と答えた。

マカラはロムビアの言葉を聞くと、ひどく泣いた。涙の流れが自分の膝や胸や頭を浸して、ついに溺れて死んでしまつた。

すると、マカラの鶏が「ククルクー マカラがおぼれて死んだ」と鳴いた。

これを聞くと、ロムビアは短刀を取り上げて、ねむっている怪しい男を刺し殺した。それから、彼女はガムビルの花をとつて、マカラの涙の流れの上になげつけた。たちまち水がひいてしまつた。

水がすっかり干し上がると、マカラは再びよみがえつて「ロムビア、かいだんをおろしておくれ」と言つた。

ロムビアがかいだんをおろしてやると、マカラは家の中に入つて来た。

以上の三つの話に登場する女性について解説しておく。

「王女の物語」の王女は宣言したように、三人の子供を夫との間にもうけた。

男に化けてずい行しながら、夫に気づかれぬように三人の女性に変わつて、夫の愛をつかんでいく話である。

これは女性は、男性に対して次つぎと変わつて見せることが出来るという物語といえよう。

「涙の力」の母親は二つの面を物語っている。

一つは子供に対する責任感の強さである。彼女は海豚になつてしまつても、子供に乳を与え続ける。

このような母性愛の強さを語る話は日本にもあると思われるが、海豚になつた母親が、なお子供に乳をふくませるといふような話はない

王女は「よろしゅうございます。近寄ってごらん下さい。びっくりさせてあげましょう」と言つて、書記を自分の居間に案内した。そして、王女は一人の子供をひざに、一人を右に、一人を左に掻き抱いて書記に見せた。

書記は始めの内は黙っていたが、とうとう堪りかねて、「三人ともだれの子供だか分からないので、私は王様の所にたずねに行つてみる」と叫んだ。そして、王様の所に行つて、王様に「姫は約束を守らない、あの子供たちは私の子供じゃない」と言つた。

王様は笑いながら「そんな約束は娘にきいたほうがいい。大臣をここに召し出すことと致そう」とおっしゃつた。

大臣たちは王様、書記、王女、三人の子供の前で「私たちは分かりませんから、姫君ご自身にお任せして、その返事を聞かせていただきます」と申した。

王女は「この子供たちは夫の子です。」と答えた。

書記は「どこで私はお前に会つたのですか。それは私の子供じゃない。私たち二人は、この三年の間にお互いに会いもしなくて、口もきかなかつた。」と詰めよつた。

そこで、王女は書記と一緒に旅立つた時から、再び自分の故郷に戻るまでの全部の話をした。それから、証拠として、黄金をかぶせた剣と短刀とダイヤモンドの指環を見せた。

書記はおどろきながら、喜んで、王女と三人の子供を抱きしめて、うれし泣きをした。

それから彼らは仲よく平和に暮らして、幸福なかぞくとなつた。

2. 涙の力

あらすじ…ある所に一つの家族が住んでいた。その夫は非常にわがままだった。

インドネシアと日本の女性像の比較 (アドゥン)

ある日、夫のための魚を自分の子供にやった妻は、夫にしかられた。夫は糸巻竿で、妻の首の骨を血の出るまで殴りつけた。

血まみれになつた妻は、それを洗い落とすために川に行つた。すると、突然足からへそまで海豚になつてしまつた。彼女は悲しくて、泣き始めた。

そのうちに二人の子供がそこへやってきたが、変わった母の姿を見ると、子供たちはすっかり悄沈してしまつた。

すると、母は叫んだ。「もう、悲しまなくてよい。こんな姿に変わらなければならなかつたのも、神様のおぼしめしでしょう。毎日午前中に私の所において、乳を飲ませてあげるから。その時に忘れないように石の皿で炊いて、ミルクで湿したお米を持ってきなさい」と言つた。それから彼女は、年上の子供に自分の涙を渡して、「それをこっそりと父の背に擦りつけるように」と言つた。

子供が母に言われた通りにすると、父親は急に気がやさしくなつて、「お母さんはどこにいる」ときいた。そして水辺にいると聞くと、いそいで妻をさがしに出かけた。彼は水の中にもぐつて妻の後を追つた。しかし、いくらいっしょけんめいになつても、妻に追いつけられなかつた。つかれてしまつて、気を失つてしまつた。そして、気がついた時に、海豚に変わつてしまつた。

それは妻をいじめたからだった。

3. ロムビアとマカラ

あらすじ…昔、二人の子供を持った母がいた。娘の名はロムビア、息子の名前はマカラだった。

ある日、この二人の子供がレポーと呼ばれる魚を捕まえた。

母親はその魚を煮たあとで、娘のロムビアに「お前たちはレポーを食べてもいいが、はらごは私に残しておいておくれ」と言つた。

物や金銀を持って行って結婚の代として王女にあげようとした。

着くと、まず王女の両親の館に行つて、王女の言葉を話して、結婚を申し込んだ。

相談がおわつたあとで、やがて結婚式が行われた。代金は千レヤーレンであった。

彼は石造りの家を王女に与えて、すぐ船に乗って旅に出た。

けれども、夫が出かける前、王女はいそいで抜け道を掘つて父王の所を訪れて、十着の男着と十着の婦人着と箱を一つとおともの若者を一人たのんだ。そして王女は一枚の男の着物を着て、夫の船と一緒に家来として乗って行つた。

ある外国に着いて、書記は王女と陸へ上がった。書記は一軒の家を借りて、そこに住んだ。

王女も一軒の家を借りて、夫の家の前に住んだ。王女はすぐ女の着物を着ると、ほんとうに美しくなった。

ある日、王女は外へ出て、夫に出会つたが、夫は自分の妻とは気がつかなかった。

書記は一人の下僕を呼んで、彼女はまだ結婚していないかどうか、そして自分の妻になる気はないかどうかとをたずねさせた。

王女は「四年前りこんしました。もし、その方が本当に私と結婚したかつたら、承知します」と答えた。

二人は結婚して、王女は間もなくにんにんした。子供が生まれると、書記はたいへん喜んで、千レヤーレンの価のある宝を残しておいて、また船に乗る前に、黄金で飾つた剣を妻に贈つた。それには彼の名と彼の父の名と彼の故郷の名とが彫りつけてあつた。

王女は乳母を求めて、その女に千レヤーレンやつて、子供を育てさせた。そして自分はまた男の着物を着て、書記の船と一緒に乗つた。

書記はまたべつの国に着いた。そこでも、王女は上陸して、以前と

同じやり方で書記と結婚して、一人の男の子供を生んだ。その次の旅へ行く前に、書記はまた息子に一つの短刀を与えた。それにも彼の名と彼の父の名と彼の故郷の名とが刻みつけてあつた。それから彼らは他の国に行つた。

そこでも王女は、また書記のために一人の娘を生んだ。父はその娘にダイヤモンドの指環を与えた。それにもやはり、彼と彼の父と彼の故郷の名が彫りつけてあつた。

また出発の準備をととのえて、船に乗り込んだ時、書記は「私に妻は誓いを立てたのだ。妻は、私が三年の間するすにするあいだに、かならず三人の子供をもうけてみせると言つたのだ。もし、その約束を破つたら、殺されてもいいと言つた。だから、どこへもたちよらないで急ぎ帰ることにする」と言つた。

とうとう彼らは王女の故郷に帰りついた。船がいかりを投げると、王女はすぐに父親に向かつて「お父様、思召しに叶いますならば、大急ぎで三つの船を出して、三人の子供を迎えにやってください。できるだけ早く子供たちがここに着けるように、大急ぎでお願いします。私はこれから石造りの家にまいりますので、子供が着いたら、早くよこしてください」と言つた。一方、家来にばけていた王女は、書記に向かつて「約束の日までまだ七日あります」と言つた。王女は石造りの家に着くと、すぐに抜け道をふさがせた。

書記の使者は王の館にやってくるまで、彼の無事な帰着を知らせ、王女と書記との間の約束のことを伝えた。

王様は王女の言つた通りのことを実行した。

三日の後、三つの船が帰つて来た。三人の子供たちはすぐ母の許に送られた。

七日すぎると、書記はまっすぐ石造りの家に行つた。そして「王女、私は帰つて来た。私たちの間の約束はどうですか」と言つた。

まもなく本当に大雨がふってきた。谷間が急に川になって、魚は全部海へ戻った。

婆さんは不思議なことだと思いつながら、家へ帰った。考えたあとで、大きい魚と同じようにアラアの神様にたのもうと思った。そして、天に向かつて、婆さんは「アラア神様、どうぞ金をください」とずっと毎日祈った。

となりの人たちは婆さんにじゃまされるので、何回も止めようとするが、婆さんは聞かずにずっと祈る。

それを見て、となりの人はいたずらをしようと思う。彼はがらくたをふくろに入れて、婆さんのせなかに落とした。

重くていたくても、婆さんはその落ちたふくろをとって、開ける。ふくろの中いっぱい金があるので、ほんとうに喜んで、アラア神様におれいを言う。

婆さんは急に金持ちになって、だれでも助けてあげた。

いたずらをした人はそれを見ると、婆さんと同じようにしたいと思つて、婆さんに「婆さん、あなたが金持ちになった原因は、私ががらくたを入れたふくろをあなたのせなかに落としたからだ。今、私もあなたと同じようにしてください」とたのんだ。

婆さんはとなりの人が言ったとおり、がらくたを入れたふくろをせなかに落とした。

でも、そのふくろを開けて見たが、ちつとも変わっていない。

となりの人はいたみながら、家へ帰って、どうして私はアラア神様に金をもらえなかったのかと考えた。

この話に似たものは全体としては仏教説話集、後半は正直で人のよい人と欲ばりの人の話にみることができないのではないかと感じた。

しかし、今回調べた鹿兒島、長崎、沖縄、奄美地方の神話、伝説の

中にそうしたものを見つけ出すことはできなかった。わずかに、通じる点をもつものとして、神様の信仰の大切さを語っている「仲嵩の由来」のあらすじを次に記す。

2. 豊かな田をもっている兄がいたが、妹がすすめても、兄は神様を信じなかったため、神様は怒って、イビラで仲嵩をひいて、田をこわしてしまった。

兄に信仰をすすめる妹と無信仰の兄が出てくるが、妹のことが兄に信仰をすすめること以上に記されていないので、あまり似ていない。なお、神が仲嵩を移してしまったという話は「山々の由来」Bの発想と同じである。

五

最後に、インドネシアの女性が主人公になっている神話、伝説で鹿兒島、長崎、沖縄、奄美地方に、似たところのある話を見出せなかった三つの話を記す。

1. 王女の物語

あらすじ…王女アルーは「もし、だれか私を愛して、結婚したいという人があったら、私と結婚したあとで、主人は三年間旅に行かなければならない。そして、主人が戻るすの間に、私はきつと三人の子供をもうけてみせる」と言った。

その言葉はだんだん広まってとうとうある書記の耳に入った。彼はその言葉をおもしろく思って、その王女の所に行つて、結婚を申し込んでみようと思ひ、すぐに王女の館のあるネゴライへ行つた。彼は宝

いうことはだれにもせつめいしなかった。

ある日、少年は母親に自分の父親についてきいた。母親が返事をしないので、少年は急に犬を呼んで、一緒に森ににげた。

王女は自分の子供をさがして森に行き、少年が殺した犬と短刀をみつめた。その犬が子供の父親であったが、王女はそのことを他人に言わなかった。

B. サング クリアングはその後、別な所に住んでいたダヤング スンビの所にやって来た。

そして、若く美しいダヤング スンビを見ると、彼女に結婚を申し込んだ。

ダヤング スンビは知らないふりをしながら「さて、私と結婚したいなら、あなたは一夜の内に、一つの湖を作って、私のお召船を造ってください」と答えた。

夜になると、サング クリアングはさっそく作りはじめた。一夜のうち広い湖と船がほとんどでき上がった。

プトウリ ダヤング スンビはおどろきながら、手を東に差し伸べた。すると、地平線がたちまちあかくなって、太陽が昇った。ダヤング スンビはサング クリアングに「私はお前の母です」と言った。

右の「山々の由来」のAの部分は沖縄、奄美地方にある犬を夫とした女性の話に類似している。次に沖縄、奄美地方の話をつたあげる。

2. 「犬と女」の話。

昔、ある所は津波で一人の女の人だけ生き残った。そして、その女は犬を夫にした。

3. 「いぬがん」の話。

琉球中山王にはこぶ貢物の船が荒天である所に着いた。

ところが、その後、毎晩男の人が一人ずつ犬にかみ殺されて行つた。そして、一匹の犬と一人の女の人だけ生き残って、女と犬は一緒に暮らした。

山々の由来のAのプトウリ ダヤング スンビはいろんな男から結婚を申し込まれても結婚せずに、犬とかりを続けていたので、男が全くなくなつて、犬と結婚する「犬と女」や「いぬがん」の女性と異なるが、犬を夫とする点は共通している。

このように沖縄、奄美地方にはインドネシアと同じ犬を夫とする話が伝えられている。

四

次に「老婆と干上った魚」について述べたい。これは次のような内容である。

1. とつてもびんぼうで、助けてくれる者もない婆さんがいた。この婆さんは年をとつても、アララの神様のことを知らなかった。

ある日、婆さんは食物をさがすために海に近い所に行つた。一方は険しい崖になって、深い谷があつて、魚が谷間の流れから海へ下つて来た。

ところが、水が干上つて、海へ出ることができない。

これを見て、婆さんはいへん喜んだ。たくさん魚に近づこうとすると、あるいちばん大きい一匹の魚が魚の王様で、人間と同じように話すことができた。その魚が天に向かつて、「アララ神様、どうぞ雨をふらしてください」と言った。

3. 次に難病の王女がなおる部分に行く。
未知の岸边に流れ着いた王女はある一本の高い木の下に住居を定め
た。

家来たちは食物を得るために、畑をこしらえて稲を作ることにした。
ある日、王女は一人で留守番をしていたが、鳥を追い払うために自
分で庭におりて行った。

ところが、鳥のほかに白い水牛がいて、王女に向かってきた。水牛
はずつと追つ駆けて行く。王女はどうとう疲れて、地にたおれてしまっ
た。

水牛は王女の体をペロペロとなめただけで、少しも危害を加えよう
とはしなかった。

水牛が立ち去ったあとで、王女はすぐ沐浴をして、それから鏡を見
ると、自分の病気がなおっているのと、とつてもびつくりした。

その時から、毎日王女は皆が畑に出かけたあとで、水牛に体を舐め
させた。こうして、病気がすっかりなおって、もとの美しい王女にか
えることができた。

4. 鹿児島地方にある「和泉式部」の話である。この話の主人公は和
泉式部という女房である。内容は次のとおりである。

和泉式部は上東門院の女房で、らいびようにかかった。いくつかの
神様にお願してもぜんぜんなおらなかった。

ある日、しかたなしに和泉式部は高い所から体をなげだして「もう
どんなにやっても、なおらないので、神様も助けてくれないので、死
んだほうがいい」と言つて体をなげだした。

けれども、だれが助けてくれたかも分からない。ただ何者かに救わ
れた気はした。がけの下の方に着くと、ほんとうに無事で、病氣もすつ
かりなおっていた。和泉式部は喜びながら京都へ帰った。

この二つの話を見ると、両方とも女の人が病氣にかかっている。そ
して、その病氣はなかなかなおらない。ちよくせつその病氣をなおす
ための方法は、つきてしまった。

あきらめながら、ルヴーの王様は自分の愛娘から別れることに決め
た。

一方、和泉式部はあきらめながら、死んだほうがいいと考えた。し
かし、ほんとうに不思議なことがおこった。

ルヴーの王女は思いがけず、体を白い水牛がなめたあとで、すつか
り病氣がなおった。

和泉式部も思いもよらず、がけから身をなげだしたら、無事に下の
方に着いて、病氣もすつかり治った。

このようにインドネシアの「難病の王女と白い水牛」の話は鹿児島
地方の二つの話と似ているところをもっている。

三

次に「山々の由来」について述べたい。

「山々の由来」は次のような内容である。

I. A. ガロエ国の王様に一人の王女があつて、プトウリー ダヤ
ング スンビと言つた。

王女は非常な美人で、いろんな国の王様が王女を妃に迎えにやつて
来たが、皆ことわつてしまった。王女のいちばん好きなことは狩猟で、
毎日忠実な獵犬を連れて山へ狩猟に行った。

ある晩、王女は帰らなかった。

それから、六年ぐらいたつたあとで、突然王女が犬のほかに一人の
美しい少年と一緒に戻つて来た。少年はサング クリアングと言つて、
王女は自分の子供として育て上げた。その子供の父がだれであるかと

に「今、ごはんをたいているところですが、けっしてそのふたを開けないでください」と言う。

でも、気になって夫はそのふたを開けてしまった。中を見ると、ただ一つの米があるだけなので、びっくりしてまたふたをかぶせた。

デヴィ ナヴァング ヴランは家へ帰ってすぐしたくしたごはんのふたを開ける。夫に開けられた米はぜんぜん変わっていない。そのあと倉の米はなくなって、その下から羽衣がでてくる。

5. この部分に関係があるのは沖縄地方の「穀物の始まり」の次のところである。

ある日、妻はなべに水を入れて、ふたをしめて「私は水をくんでくるから、火をもやしてください。でも、なべのふたをぜったいに開けてはいけません」と言って出かけた。

しかし、夫はなべの中が見たくなって、開けてみると、ただの水であった。

帰ってきた妻はおこって「あなたは約束を破ったので、りこんしましよう」と言って、別の家に住むことになる。

この部分について、前と同じように、似ている点を述べる。

どちらも料理をする途中で「ふたを開けないでください」と言って出ていく。

夫は約束を破ってふたを開けてしまう。

夫がふたを開けたので、料理はできていない。

このようにインドネシアの「魔法の上衣の行方」の話は沖縄の三つの話と共通点をもっている。

二

1. インドネシアの「難病の王女と白い水牛」の話。この話の主人公はルヴーの王様の王女である。内容は次のとおりである。

ルヴーと言う国の王女は、不治の伝染病にかかってしまった。

王様は国民の安全のために、しかたなしに自分の愛娘から別れることに決めた。王様は一つの大きい筏を造らせて、それに王女や乳母やお付きの者を乗らせた。

長い間波にしたがって、あちらこちらと流された後、王女たちは未知の岸辺に流れ着いた。

2. 次に鹿兒島地方の「蛇子姫」の話を見てみる。

いざなぎいざなみは大八洲に住んで、子供たちが生まれた。

子供たちの中で、いちばんきれいな女の子がいて、蛇子と言った。

残念ながら、蛇子は三才になっても、足が立たなかつた。

両親は非常に心配して、くるしんだ。

しかし、しかたなく両親は蛇子をあまのいはくすと言う船に乗せた。

蛇子の船はその後、二の宮と言う所に着いた。その船から間もなく枝や葉が出て、とうとう天にとどくような大樟となった。その木の実に多く多くの若い樟がはえて、大樟林になった。

この部分について、似ているところを述べる。

身分の高い人の娘が難病にかかる。

そのために、海に流される。

この二点で、右の二つの話はよく似ている。

ません。あなたは約束を破ったので、子供が泣いたら、物見台に連れてのぼって、黒いもちごめを一つ燃やしてください。私はきつとおりて来て、子供に乳を与えます。」と言う。言いおわると、デヴィ ナヴァング ヴランはオントクスマモと言う羽衣を着て天にとんで行った。

次に奄美の「天女の子」と沖縄の「察度王」の話を続けて記す。

2. 「天女の子」

この話の主人公はアムリガーと言う天女である。内容は次のようになってる。

天からアムリガーがおりて、川で水を浴びていた。その羽衣をある男がみつめて、かくしてしまった。天に戻れなくなったアムリガーを無理に連れて帰って、その男は妻にした。そして、子供が生まれた。

ある日、兄が妹をおぶって、こもりうたに「泣かないで、母の羽衣は倉のみの下にあります。」とうたう。

それを聞いた母は夫がかくしていた羽衣のある所を知って、それをとって、身につけて三人の子供を抱きながら、天にのぼった。

ところが、天の様子が変わって、天人の住む所もなくなったので、しかたなしにまた地上へ戻って、三人の子供に仕事を分けて与えた。

3. 「察度王」

あらすじ…奥間子と言う男の人が川で手足を洗っているときに、めずらしく美しい着物が木にかけてあるのを見つける。その着物をとって、自分の家の宝物にして、倉の中にかくしてしまう。

その川で水を浴びていた女が川から上がって、自分の着物がなくなっているのを知る。「あれ、着物がなくて、帰ることができない」と女

は言った。

それを聞いて、奥間は「そしたら、私の家に来なさい。私の着物をかしてあげましょう」と言う。女はしかたなしについて行った。

こうして、夫婦になった。そして長女と長男が生まれた。

ある日、弟が泣くと、姉が「お前、泣いたら、倉の中にある羽衣を着せてしまおう、泣くな」と歌っていた。

母さんはこの歌を聞いて、「ああ、そうか、私の羽衣は倉にかくしてあるんだ」と言っただけで倉に入って、羽衣をとってとんで行った。

「魔法の上衣の行方」と沖縄、奄美地方の二つの話について共通する点を述べてみたいと思う。

天女がいると言う考えがある。そしてその天女は地球にある川や泉の水を浴びる習慣があると考えられる。それから、天女と言うのはもちろん普通の人間とちがって、天と地球を行ったり来たりするので、着る物も特別な着物、すなわち羽衣を着ている。

また、天女と言うものは普通の女の人よりも美しいので、男たちに恋されることはあたりまえだと考えられている。

羽衣をとられた天女は人間の女性と変わらないと見られていて、男性と結婚ができる。

結婚すると、両方とも人間と変わらず、子供が生まれている。

しかし、天女は最後まで人間と生活できず天へ帰ってしまう。

それでも、子供があるので、まだ責任がある。天女はきちんと子供への責任をはたしている(天女の子)。

4. 夫が約束を破ったので、羽衣がみつかる場所であるが、インドネシアの「魔法の上衣の行方」では次のようになっている。

ある日、デヴィ ナヴァング ヴランは川へせんたくに行く前に夫

インドネシアと日本の女性像の比較

—— インドネシアの女性が主人公となって
いる七つの神話、伝説について ——

ダナスブラタ・アドウン

パジャジャラン大学
文学部日本語日本文学科
一九九三年九月二四日

はじめに

今回の共同研究のかだいは「インドネシアと日本の女性像の比較」ということであった。

ただし、「比較」といっても、すでに神話の交流も考えられたりしているもので、むしろ交流の可能性に重点をおいた読みあわせをするということにした。

この面については、よく知られているように日本は南北に長くインドネシアとの交流も地域によって差があるのではないかと考えられる。そこで、このたびは半年という時間のせいやくもあるもので、鹿児島、江戸時代オランダとの交易が行われていた長崎、古くから南方との交易が行われていたと見られる沖縄、奄美地方の三地域に絞って、その比較を行うことにした。

また民間説話を通してということであったが、これも交流を見るという面や、資料が、よくせいりされているということから、伝説を中

心にして行うことにした。

比較は女性が主な登場人物となっている伝説類の全てに目を通して行ったが、成果報告としてまとめるにあたってはインドネシアの女性が主人公となっている七つの神話、伝説全てを日本の三つの地域の女性が主な登場人物となっている伝説と対照し、その交流の認められる点を中心に行うこととした。

以下インドネシアの女性が主人公となっている七つの神話、伝説の一つ一つについて述べていくことにする。

一

1. インドネシアの「魔法の上衣の行方」の話。この話の主人公はデヴィ ナヴァング ヴラン (DEWI NAWANG WULAN) という天女である。関係のあるところだけ述べる。

キヤイ アゲング フォン タンプという若者が山の中で一羽の鳥を追いかけて、ウイドーダリと言う天女たちの水浴場の泉に着いた。その時、天女たちはそこで水を浴びていた。彼は美しい天女の一人の着物をとってかくしてしまった。

水を浴びた天女たちは自分の着物をとって空へ帰ろうとするが、デヴィ ナヴァング ヴランと言う天女は着物がないので、空へ帰ることができない。

それを見て、若者は彼女に近づいて、彼と結婚したら、着物を返すと約束する。

しかたがないので、天女は若者の言ったとおりにすることにして、二人は若者の住んでいる所へ行って結婚した。そして子供が生まれた。その後、夫が約束を破ったので羽衣がみつかることになる（後述）。天女は悲しみながら夫に「残念ながら私は天空へ帰らなければなり

説の大意を纏めたものを作成されている。筆者はダナスブラタ・アドゥン氏の熱意に感嘆した次第である。

最後に共同研究六箇月の最後の二箇月、鹿児島が大水や台風等の災害に襲われ続けたことはダナスブラタ・アドゥン氏にとって最も気の毒なことであった。宿泊先が営業不能に陥り、五十日程本学に宿泊されたのであるが、大学にこれほど長期に寝泊まりされたのも氏にとって初めてのことでなかったか。今年には鹿児島にとつても百年に一度位の異常な年で、鹿児島が毎年こうなのではないということがお分かり頂けたかどうか。ともあれ、既に帰国されたダナスブラタ・アドゥン氏が十分な休養をとつて、母国で再び教育・研究活動を精力的に始められることを祈念しながら、この拙い一文を終える。

九月二十七日

鹿児島県立短期大学文科国文専攻

橋口晋作

参考文献

1. 荒木博之、宮地武彦、山中耕作「日本伝説大系 第13巻 北九州編」みずうみ書房 昭和六十二年三月二〇日刊
2. 荒木博之、堂満幸子、有馬英子「日本伝説大系 第14巻 南九州編」みずうみ書房 昭和五十八年三月二五日刊
3. 福田 晃、遠藤庄治、山下欣一「日本伝説大系 第15巻 南島編」みずうみ書房 平成元年六月二〇日刊
4. 松村武雄「世界神話伝説大系15 インドネシア ベトナムの神話伝説編」名著普及会 一九九二年十二月二十日刊

一九九三年四月から一九九三年九月まで、鹿児島県立短期大学でインドネシアと日本の鹿児島、長崎、沖縄地方の伝説、神話のうち女性を主人公とした話を読んできました。

それぞれの話の内容が理解できるまで、なかなか苦勞しました。古い言葉や古い漢字や地方語なども多いので、すごく時間がかかりました。やっとこの研究報告を書きおえました。

この研究報告ができあがったのは、福岡の財団法人よかトピア記念国際財団の奨学金のおかげであります。ここに、ここから感謝申し上げます。そして、私を紹介してくださった鹿児島県立短期大学の岩切成郎学長と共同研究者の橋口晋作先生にも感謝申しあげます。

皆様のご親切に神様がもつとよいことを与えるように祈っております。

このかんたんな報告はところどころにまちがったり、たりなかったりすることもありますが、皆様のご意見を喜んで待つております。

同時に、これがいくらかでも皆様のやくにたつようにとのぞんでおります。

鹿児島、一九九三年九月二四日

パジャジャラン大学

文学部日本語日本文学科

ダナスブラタ・アドウン

本稿は、平成五年度よかトピア記念国際財団のフェローシップによる共同研究の成果報告書である。共同研究者はダナスブラタ・アドウン氏と筆者。ダナスブラタ・アドウン氏はインドネシアのパジャジャラン大学文学部の教官。一九五二（昭和二七）年の生まれ。一九七八（昭和五三）年、同大学文学部日本語日本文学科を卒業された後、一年間の日本留学を経て、一九七九（昭和五四）年から母校の教壇に立たれている。

今回の共同研究の主題はダナスブラタ・アドウン氏の出されたものである。民間説話を通してというのが当初の目的であったが、都合で伝説を中心に比較することになった。研究に対して、ダナスブラタ・アドウン氏は十冊の民間説話集を持って来られたが、「世界神話伝説大系」に翻訳されているものと殆ど変わらないということだったので、多数の話を取載している翻訳本（名著普及会版）の方を使った。一方、「日本伝説大系」は多くの「類話」を合わせ記しているが、時間の都合で、これは殆ど参照出来なかった。心残りは都合で遂に直接伝承者に話を聞くという機会を持たなかったことである。

右に記したように本研究は全て文献資料に基づいて行われた。又、日本のものは鹿児島県・長崎県・南島に限定して、他地域のものは殆ど割愛した。今回の調査では長崎県の伝説には共通するものを見出せず、共通点は鹿児島県・南島の順に多くなることが認められた。特に南島は、鹿児島県をはじめとする本土地域とは比較にならない程、インドネシアの伝説に近いものがあると思われた（全般に）。

ダナスブラタ・アドウン氏は本稿の外に、これに倍する量の、各伝

インドネシアと日本の女性像の比較

—— インドネシアの女性が主人公となって

いる七つの神話、伝説について ——